

霞

—2010年度冬季展示室だより—

土浦市立博物館

平成23年1月5日発行(通巻第14号)

当館では「霞ヶ浦に育まれた人々の暮らし」を総合テーマに、春(5~6月)・夏(7~9月)・秋(10~12月)・冬(1~3月)と季節ごとに展示替えを行っております。本誌「霞(かすみ)」は、折々の資料の見どころをご紹介します。展覧会や講座のお知らせ、市史編さん事業や博物館内で活動をしている研究会・同好会などの情報もお伝えします。

古写真・絵葉書にみる土浦(14) 絵葉書

「(土浦名勝)名勝川口の閘門こうもん」



手前が霞ヶ浦、中央の開口部が明治39(1906)年に完成した土浦(川口川)閘門こうもんで、右手に閘門の扉ぎ(開いた状態)が見られます。奥が鉄道線路です。土浦の町におこる洪水の大きな原因のひとつが霞ヶ浦からの逆水ぎやくすいでした。土盛りした鉄道線路の堤を防水堤とするとともに、閘門を新設し、扉を締め切ることによって洪水の被害は大幅に軽減されるようになりました。【情報ライブラリー検索キーワード「川口川閘門」「洪水」】

目次

- 古写真・絵葉書にみる土浦(14)・・・1
- 博物館からのお知らせ・・・1
- 【館長講座及び各展示と催し物等】
- 灰釉短頸壺(古代)・・・2
- 棕毛払子・黄毛払子(中世)・・・3
- 土屋蔵帳(近世)・・・4
- 幼稚園の掛図(近代)・・・5
- 布作りの道具(近代)・・・6
- 市史編さんだより・・・7
- 霞短信「法雲寺と文化財」・・・8
- コラム(14)・・・8
- 情報ライブラリー更新状況・・・8

博物館からのお知らせ

★★館長講座(茂木雅博館長)★★

「飛鳥の遺跡を語る」と題し、古代大和の遺跡をご紹介します。

1月16日(日)・3月20日(日)午後2時～ 会場:視聴覚ホール ※2月はお休みです

★第3回関東地区博物館協会共同企画展「水郷めぐりと筑波山—遊覧都市土浦とその時代」★

12月18日(土)～2月16日(水) 昭和初期の絵葉書や観光パンフレットなどを通して土浦周辺の観光地をご紹介します。

展示案内会 1月9日(日)・2月6日(日) 午後2時～(30分程度)

★「むかしの暮らしの道具」(小学校校外学習参考展示)★

1月12日(水)～2月16日(水) すこし昔の暮らしに使われた道具をご紹介します。

★「わたからもめんへ」はたおり教室手織り展★

2月19日(土)～2月27日(日) はたおり教室受講生による作品展示と活動紹介です。

はたおり(裂き織り)・糸紡ぎ・綿の種とり体験コーナーもあります。

★第32回特別展「戦国武将小田氏と法雲寺」★

3月19日(土)～5月8日(日) 中世の戦国武将小田氏とその菩提寺である法雲寺の寺宝を紹介。

●特別展展示作業のための臨時休館日があります● 3/15(火)～18(金)、5/10(火)～13(金)

また、3/13(日)は展示作業のため、展示室3を臨時閉室いたします(展示室1・2と土浦城東櫓は無料開放)

★★展示室3で特別展「戦国武将小田氏と法雲寺」を開催するため、2011年度春季展示は5月14日～6月中旬までです。「霞」第15号は5月14日(土)発行予定です。★★



博物館マスコット
亀城かめくん

※お知らせ欄の行事・日程は一部変更となる場合がございます。

かいゆうたんけい こ

こつぞうき

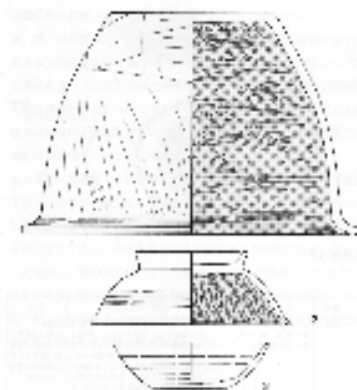
灰釉短頸壺 — 平安時代の骨蔵器 —

2008年度の『展示室だより 霞』第4号で、古代のやきもの「灰釉陶器」について解説しています。その際、市内田村・沖宿遺跡群（現・土浦市おおつ野）の八幡脇遺跡の火葬墓から見つかった骨蔵器の中に、灰釉陶器の短頸壺があることに触れています。今回は、この平安時代の骨蔵器に使われた灰釉短頸壺をご紹介します。

骨蔵器は、火葬骨を納めた灰釉陶器の短頸壺（口の部分が極端に短い壺）を本体とし、土師器の杯で二重に蓋をし、さらにその上に大型の鉢をかぶせ、炭化材を敷き詰めた穴に丁重に埋納されていました。白色の素地に淡い緑色の美しい釉をかけた灰釉陶器は、愛知県にある猿投窯で焼かれたもので、奈良時代から平安時代にかけての高級陶器のひとつです。この短頸壺の製作年代は9世紀前半頃ですが、火葬墓の年代は蓋に使われた杯や鉢の年代から9世紀終わり頃から10世紀初め頃と考えられ、この灰釉陶器が100年近くものあいだ大切に伝世されたことをうかがわせています。壺の肩部にある大きな孔も、割れ口が全く摩耗していないことや鋭利な器物による殴打痕が見られることから伝世時の破損ではなく、火葬墓に埋納する直前の何らかの儀礼に伴うものかと考えられます。また、猿投窯産の灰釉短頸壺が、東京湾岸や千葉県北部から茨城県南部の霞ヶ浦・利根川水系など、古代の内海沿岸に面する遺跡に多く出土することから、太平洋上を東西に行き来する活発な海運の存在も想像されます。

当時としては最高級の骨蔵器に埋葬された人物は、成人の女性と鑑定されています。当遺跡の調査に関わった奈良国立博物館の吉澤悟氏は、丁重かつ格式高く埋葬された人物はとかく男性首長的なイメージが強い中では意外であるとしつつ、被葬者として母系集団の指導的立場にある女性、あるいは男性首長の妻や母、娘など特別な感情を持って葬られた人物、また隣接するこの火葬墓と同時期の遺跡から「国厨」の墨書土器が出土していることと関連付けて、国司やその周辺官人と姻戚関係をもつ女性、あるいは采女として中央に出仕した女性が帰葬されたものなどなど、多様な可能性を想定されています（上高津貝塚ふるさと歴史の広場第11回特別展図録『火葬と古代社会—死をめぐる文化の受容』をご参照ください）。（塩谷 修）

※右の図と写真は、関口満他『八幡脇遺跡』発掘調査報告書（2009年）より転載いたしました。あわせてご参照ください。



骨蔵器の蓋（杯と鉢）



灰釉短頸壺

2/26（土）午後2時から
このページでご紹介した
資料の展示解説会を開催
いたします。

下記の資料もあわせてご覧ください。

- 長峰遺跡出土「国厨」墨書土器（古代コーナーに展示）
- 根鹿北遺跡出土「瓦塔・瓦堂」（古代コーナーに展示）



棕毛払子・黄毛払子

— 中国元時代唯一の遺品か？ —

市内高岡にある大雄山法雲寺^{だいゆうざんほううんじ}には、中国元時代の作品とされる棕毛払子と黄毛払子の2つの払子が伝来しています。払子は、仏教の法要の際に僧が威儀を正すために用いる法具とされ、麈尾^{しゅび}、白払^{びやくほつ}ともいいます。もとはインドで蚊やハエなどの虫を払うために使われていた道具でしたが、後に中国に伝わり仏教僧侶、特に禅僧の間で流行しました。禅宗で用いられる払子は、煩惱^{ぼんのう}を払う法具として鎌倉時代に日本に伝えられ、後に払子自体が仏法の働きを意味するようにもなったようです。

払子の柄先には、獣毛などが束ねてつけてありますが、麈尾とも称されるように麈^{おおしか}（大鹿）の毛が用いられるものがあります。これは、リーダーとなる大鹿の尾の動きに群れの鹿が従うことから、信者が教主に従う意を表して大鹿の尾の毛で作るとされています。一方、ヤクの尾の毛を使ったものもあります。ヤクの尾の毛が白いのを白熊^{はくま}、黒いのを黒熊^{こくま}、赤く染めたものを赤熊^{しやくま}といいます。これは、ヤクの毛を払う所作によって「厄を払う」という語呂合わせにもなっているようです。

法雲寺伝来の棕毛払子は、柄が竹製で波紋・竜・草花紋等が浮彫されています。また、毛束は棕櫚の皮を一本一本割いたものを用いており、柄部分を連環状に編み込んでいます。この棕毛払子は、開山国師^{かいざんこくし}（注）所用の払子として伝わっています。現在のところ、他に元時代に作られた払子が見つかっていないことから、この払子は元時代唯一の遺品ではないかとの説があります。

黄毛払子は、柄心を朱の絹地で覆い、植物繊維を巻き込んでいます。柄元は棕櫚の皮の繊維を撚って遊環を作り、柄の中程に2本の細長い紐を結びつけています。縁は棕櫚の皮の繊維紐で軍配状の形に作り、内側を植物繊維であわじ結びに編んでいます。毛束は黄色で、獣毛と思われるものを12条に分けて軍配状の縁に取り付けています。この払子は、元代末期ないし明時代のものと思われ、箱書には水戸市の信者から寄進されたものであることが記されています。

（中澤達也）

（注）中国元時代の禅僧中峰明本^{ちゅうほうみょうほん}のこと。法雲寺を開いた復庵が、師の中峰を開山第1の祖としています。



棕毛払子（法雲寺所蔵）



黄毛払子（法雲寺所蔵）

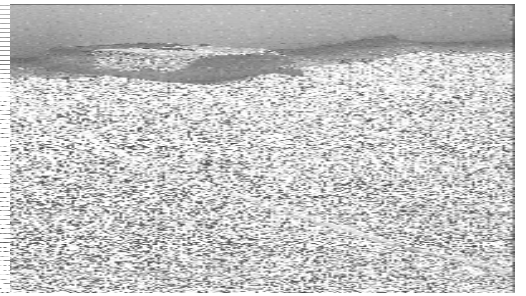
1/29（土）午後2時から
このページでご紹介した
資料の展示解説会を開催
いたします。

下記の資料もあわせてご覧ください。

- 法雲寺の瓦（中世コーナーに展示）
- 小田氏治肖像（中世コーナーに展示）



— 土浦藩主土屋家の茶道具目録 —



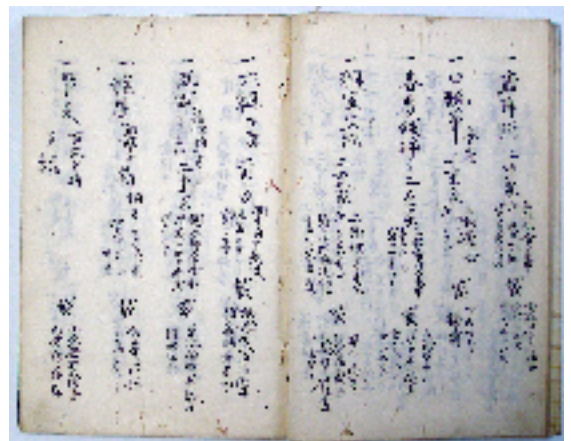
古文書「土屋蔵帳」は大名土屋家の茶道具目録です。土屋家が所蔵していた350点余りの茶道具について、名前、付属品、^{きわめがき}極書（鑑定書）の有無が書き上げられています。江戸時代には茶の湯をたしなむ多くの大名がいましたが、「土屋蔵帳」には名物と呼ばれる有名な茶道具が含まれているため、古美術や骨董に関わる人たちのあいだではよく知られており、昭和11（1936）年刊行の『茶道全集』にも収録されています。平成17年、当館では土屋家旧蔵の茶道具のひとつ「瀬戸茶入 銘 塩屋」を購入することができ、大勢の方に喜んでいただきました。この茶入も「土屋蔵帳」にちゃんと記載されています。

当館で購入した「土屋相州公御所持名器録（土屋蔵帳）」をじっくり見てみましょう。一字ずつ読んでいくと、くずし字に重々しさがなく、ことに気づきます。写真ではわかりにくいのですが用紙も薄いようです。「蔵帳」は家宝とも呼ぶべき道具が書かれている台帳ですから流麗な書体で書き留められ、藩役人が管理していたはずですが、また、道具の管理には「長持に入っている」とか「筆筒の何段に納められている」とか収納場所の情報が必要なはずですが書かれていません。これらのことから考えると当館の「土屋蔵帳」は写本のようなものです。本物はどこにあるのでしょうか。

探してみたところ、全国の博物館や文書館などで18冊も「土屋蔵帳」と呼ばれている古文書が見つかりましたが、いずれも写本のようなものでした。これらを比較検討していく中で重要なことがわかってきました。「土屋蔵帳」記載の茶道具は江戸時代後期から幕末にかけて売りに出され、茶の湯好きな松江藩主松平不昧（1751～1818）などが高額で購入していたのです。また、二代藩主土屋政直（1641～1724）が五代将軍徳川綱吉（1646～1709）から直々に拝領した「唐物茶入 宗悟茄子」が、どの「土屋蔵帳」にも記載されていないことがわかりました。徳川家とのきずなとして土屋家が一番大切にしていた茶入が、なぜ蔵の台帳にないのでしょうか。

どうも流布している「土屋蔵帳」は土屋家の「蔵帳」そのものの写本なのではなく、財政状況が悪化した土屋家が道具を売りに出した際の目録のようです。売りたいものをカタログにして知らせることは現代でも行っていますね。

「土屋蔵帳」は土屋家が所蔵していた茶道具の目録であることは間違いありません。しかし、これらは土屋家が江戸時代後期に手放した道具であって、収蔵品のすべてではなかったのです。豊かだった土屋家の文化の全貌を明らかにしていくには、まだまだ時間がかかりそうです。（木塚久仁子）



土屋相州公御所持名器録（当館所蔵）

2/5（土）午後2時からこのページで紹介した資料の展示解説会を開催いたします。

下記の資料もあわせてご覧ください。

- 三冊物名物記（大名土屋家の文化コーナーに展示）



かけず

幼稚園の掛図

— 土浦幼稚園の視覚教材 —

学校の教室で黒板や壁面に掲げて授業に使用した絵図や表などを「掛図」といいます。日本では欧米の近代的な学校教育にならった教授方法の導入にともない、一斉授業にふさわしい教材の代表としてつくり、初期の小学校において教科書と同じ役割を果たしていました。明治 18(1885)年9月に土浦西小学校(現土浦小学校)附属幼稚園として設立された土浦幼稚園には、初期の掛図が数種類残されていますが、今回は赤い木綿布で表装された、掛軸仕立ての掛図についてご紹介します。

赤い木綿布で表装されたこの掛図には、和紙に木版印刷された「五十音図」と「伊呂波図」のほかに、さらしのような布に絵具で手書きされたものがあります。写真の「幼児親睦遊ノ図」はそのひとつで、和服姿の保姆と幼稚園児が屋外で輪になっている様子の一部が描かれています。同様の構図が「幼稚園鳩巢戯劇之図」(原資料:大阪市立愛珠幼稚園所蔵)にみられますが、これは日本で最初の幼稚園である東京女子師範学校(現お茶の水女子大学)附属幼稚園の明治 10 年頃の保育の実写図として伝わるものです。洋装・和装姿の保姆と園児が唱歌「家鳩」に合わせ輪になる様子が描かれています。土浦西小学校校長坂本祐一郎は明治 18 年1月に東京女子師範学校附属幼稚園を視察しています。実際の保育の見聞が、土浦幼稚園の掛図の内容にも反映されたのかもしれませんが。

他にも魚の頭をくわえた犬が水面に映った自分の姿をのぞきこむ様子や、父母や祖父の話聞く子供の姿などを描いたものがあり、古事やイソップ物話などを題材に、修身を意識して制作したものと思われる。

幼稚園の備品台帳「図書器械名簿」(明治 23 年他)には「修身話用八幅」「作法掛図 八幅」などと記されていることから、これらの記事に相当する掛図であると推測されます。また、土浦幼稚園設立前後を記した「土浦小学校附属幼稚園事項調査」(土浦小学校所蔵「土浦尋常小学校沿革誌備考」より)の明治 19 年6月1日の項には「校長幼稚園保育用修身ノ話掛図十枚ヲ案シ、中村邦敬ニ囑ス」と、同年7月9日には「幼児修身掛図ノ要旨ヲ伝フ」(下線は筆者)という記事があり、校長自らが修身の掛図の内容を検討したことや、学務委員(学校の事務を管理する人)の一人である中村邦敬に手配(あるいは製作)を依頼したことがわかります。中村邦敬の人物像については不明ですが、中村自身が描いた可能性もあり、これらの掛図は土浦幼稚園オリジナルの掛図といえそうです。

掛図は使用するたびに損傷が進むため、使用されなくなると処分されやすいものでした。そのような中、補強を繰り返して使用され遺された掛図は、幼児教育への熱心さを象徴する教材のひとつといえるでしょう。

(野田礼子)



「幼児親睦遊ノ図」

(土浦市立土浦幼稚園所蔵)

3/5 (土) 午後2時から
このページで紹介した
資料の展示解説会を開催
いたします。

下記の資料もあわせてご覧ください。

- 「図書器械名簿」(明治時代)
- 「幼稚園動物掛図」(明治時代)



布作りの道具

— 博物館収蔵のはたおり関係資料 —

当館では、受講期間2年間で綿の栽培から収穫綿を用いた作品制作まで行う「はたおり教室」、春と秋の土曜日に実施する「はたおり体験」、夏休みの「親子はたおり教室」等を実施しています。教室や体験の実施には、「はたおり教室」卒業生からなる同好会（むいむい糸紡ぎの会・綿の実）^{いとつむ}会員のご協力をいただいています。今回は、これらの教室や講座で実際に使用している当館所蔵の道具の一部を紹介したいと思います。

① 糸車（わく・むいむい）

綿から糸をつくる道具です。土浦地方では糸をつむぐことを「わくひき」・「むいむい」と呼んでいました。「むいむい」とは糸を紡ぎ出すときに道具が発する音のことで、私の耳にも「ムイムイ」「ブイブイ」と言っているように聞こえました。糸車の先端には太い針状のツムがあります。綿の塊^{かたまり}を左手で持って先端をツムに巻き付け、左の親指と人差し指を滑らせながら右手で車をまわすと、ツムの部分で縀^よりがかかり、綿が糸になって巻き取られます。ある程度縀りがかかると、糸を手元に戻してツムに巻きつけます。これを交互に行って糸を紡ぎます。

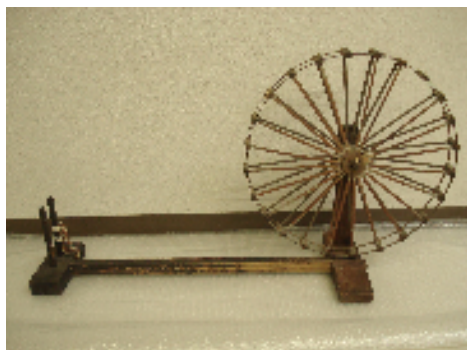
② 綿切りロクロ

収穫した綿から、種と繊維を分ける道具です。右手で取っ手をまわしてロクロを回転させ、左手で実綿をロクロに挟み込むと、はさまれた繊維の部分だけが奥に送られ、種は手前へと落ちる仕組みになっています。

③ はたおり機（はだし）

昭和30年代まで土浦地方の農家で使用されていたはたおり機で「はだし」とも呼ばれていました（「はだし」は機足が転訛した可能性がある）。はたおり機は本来、低い位置に腰を下ろして足を前に伸ばして使う^じ地機^{ばた}と、いす程度の高さに腰をかけて踏み木を踏んで使う^{たかばた}高機^{たか}の2種類があります。土浦地方に現存するのは後者のみですが、本来高機は錦^{にしき}や綾^{あや}などの高級絹織物制作に用いられ、土浦のはだしより奥行き^{しな}の長い構造が普通です。土浦のはだしは、綿糸で縀^{しま}や^{かすり}縀^{かすり}を織る際に糸合わせをしやすくするために奥行きを短く改良したものと考えられています。

（比毛君男）



写真は左から

- ①糸車
- ②綿きりロクロ
- ③はたおり機
（はだし）

1/8（土）午後2時から
このページでご紹介した
資料の展示解説会を開催
いたします。

下記の資料もあわせてご覧ください。

- 種紙〔蚕卵紙：さんらんし〕
 - 蚕籠〔かいこかご〕
 - 藁蔴〔わらまぶし〕
- （いずれも近代のコーナーに展示）



市史編さんだより

～～～ 『長島尉信著作集』について 土浦を中心に ～～～

長島尉信^{やすのぶ}については2年程前のこの欄でもご紹介しましたが、今回著作集を発刊するにあたって、尉信の著作について少し述べてみたいと思います。

土浦藩領小田村の名主であった尉信は、45歳の時に職を辞して江戸へ登り、芝増上寺^{しばぞうじょうじ}の普門律師^{ふもんりつし}のもとで算法・暦法・度量衡などを学びました。名主として農民と領主の間に立って、検地や年貢についての紛争などで苦勞したと思われる尉信は、常に農民の立場を尊重し、農民のためになる学問を志したように思われます。そしてそれまでの体験と知識を生かして農政の問題に取り組みました。

58歳の時に著した「田芹」を水戸藩主に献上したことがきっかけで水戸藩に招かれ、さらにその5年後に土浦藩に迎えられて、検地や土地の紛争の解決に当たりました。その間に多くの古文書を探し求めて、それに対する自分の見解や提言なども含め多くの著書を残しました。膨大な資料の中から、土浦に関するものを中心に翻刻し、多くの方々にお読み頂きたいとの願いから、今回の刊行となりました。

隠居した尉信は、家の庭にあった祖父の隠居所のまわりに郁子を植えて郁子園^{むべその}と名付け、自身も郁子園と号しました。「郁子園雑集^{むべその}」とか「郁子園雑記^{むべその}」と題したエッセイ風のものも数多くあります。その中には土浦の町の様子や、土浦藩士と町の人達のエピソードなども書き込まれていて、興味をそそられます。例えば、霞ヶ浦で真珠がたくさん採れて、それを江戸へ出荷して儲けた人の話や、「はや道」と呼ばれた非常に足の速い人がいて、江戸に急用がある時などその人に頼むと、朝出かけて夜の8時頃には用を足して帰ってくる話なども書かれています。

尉信は又ウィットに富んだ人だったようです。「不容圧輪」みなさんこれを何と読むかお解りでしょうか？これは「いらぬおせわ」と読むのです。いったい何が要らぬお世話なのでしょう。実はこれは痛烈な農政批判の文章なのです。農村の現状と農政の問題点を「薦かぶり^{こも}」つまり物乞いと言われた人の口を借りて、「要らぬお世話だよ」と言いながら紹介し、自説を展開しているのです。今の日本の農業問題を考える上でも、示唆に富む文章だと言えるように思います。

「浮嶋紀行^{うきしまきこう}」は土浦藩領ではない村々を廻っていますが、「常陸国風土記」などを引用したり、その土地の伝説を引いたりしながら自分の興味を満足させる、いわばリフレッシュの旅行記です。尉信の知識の広さ・深さが読みとれる文章として取り上げてみました。

又住民の戸籍調査とでもいうべき「宗門改」の記録もあります。これは土浦藩領である小田村を始めとする7ヶ村を調査するために、土浦藩の役人が出向いた時のものです。尉信の家は名主を勤めていたので、尉信もこの文書を手に入れることが出来たのでしょう。これを読むと、当時の人達がどのように藩の役人を接待し、費用をどのように負担したか、又藩の役人が村人達にどのような態度で接したかが手に取るように分かります。

そのほかに尉信が力を入れて書いているのが、小田氏・菅谷氏・信太氏などの事蹟、土浦の土地の変遷の様子や洪水の記録、税金である年貢の不公正さ、土浦城が城としての形を整えていく過程などです。自分が目にする事の出来たさまざまな史料を駆使しながら、それに自分の見解も加えて、縦横に筆を揮^{ふる}っています。口絵に載せている尉信の肖像からは、せっせとちびた筆を走らせて、一度書いた文章の上下左右の余白に、又思いついたことをどんどん書き加えていく姿が思い浮かびます。10年かかって、読みにくい尉信の字を読み解いてこの本が出来上がりました。是非多くの方々手に取って頂き、150年も前に農政に取り組んだ尉信のことを知って頂けたら、と願っております。

菅井和子（市史編さん係 非常勤職員）

「霞短信」コーナーでは、博物館活動に関わる方々の声やサークル活動記録などをお伝えしております。

今号は、博物館に貴重な資料をご寄託いただいている法雲寺の渡辺正俊ご住職にご寄稿いただきました。

「法雲寺と文化財」

法雲寺には国・県・市合わせて 35 点の文化財を所有しております。かねてより国指定文化財 5 点は、東京国立博物館に寄託しており保管に関しては安心しておりました。他の文化財に関しましては法雲寺にて保管しておりましたが、保存状態を考え平成 18 年、先代住職の意向もあり、土浦市立博物館に寄託させて頂くことになりました。現在では、文化財を含め 239 点の^{じゅうもつ}什物を保管して頂いております。その後、博物館の方々には文化財維持・修復など熱心に取り組んで頂き、修復も計画的に進んでおり感謝申し上げる次第です。また、この度「戦国武将小田氏と法雲寺」と題し、現在特別展を企画して頂いております。^{はったともいえ}八田知家を祖として 15 代にわたり約 400 年もの間、小田城を拠点として常陸国南部を支配したのが小田氏であり、法雲寺は小田氏の^{ぼだいじ}菩提寺でもあります。法雲寺は、^{えんきやう}延慶 3 (1310) 年に中国 (元) に渡って修行をされた^{ふくあんそうき おしやう}復庵宗己和尚が、小田^{はるひさ}治久の招きにより開山しました。その後、^{てんしやう}天正年間佐竹氏による小田城 (小田氏治) 攻略の際に、^{しちどうがらん しやうど}七堂伽藍は^{れいほうまきつ}焦土と化し、十に九の^{だいはんざんけんちやうじ}霊宝奇物が散在してしまいましたが、その後再建され、江戸時代においても歴代の土浦城主から^{ひご}庇護を受けて存続してきました。この度の特別展では南北朝時代から室町時代末期にかけての常陸国南部の時勢の紹介及び法雲寺の起こりと歴史について現存する寺宝から紹介させて頂く予定とのことであります。また、現在法雲寺の本山でもあります^{けんやう}鎌倉の^{だいはんざんけんちやうじ}大本山建長寺の後援も頂き、建長寺の国宝と重要文化財も展示させて頂くことになりました。記念講演会にも、^{しやうむ そうちやうげいか}建長寺宗務総長^{しやうむ そうちやうげいか}狛下が快く受けて下さり感謝申し上げる次第です。最後にこの特別展に沢山の方々において頂き、歴史への関心をもたれ、又は研究をされていらっしゃるの方々のお役に立てれば幸甚に存じます。

(法雲寺住職 渡辺正俊)

コラム (14) —博物館と広報—

「カレーを召し上がったら、船に乗りませんか？」

昨年 11 月 20 日 (土) 川口運動公園で行われたカレーフェスティバル (主催 土浦市) の会場に来ていらっしゃる方々にこんなふうにご挨拶をいたしました。霞ヶ浦と水運の関わりを取り上げた企画展「ふたつの霞ヶ浦」では、記念行事として土浦港から出航するホワイトアイリス号に水先案内人として学芸員が乗り込み、湖の歴史を解説する船上見学会を 4 回にわたって行いました。ポスターやチラシを配布し、各種メディアにも広報をお願いしました。でも、なかなか人が集まりません。博物館の広報下手は館内でいつも話題になることで、多くのお客様からもご指摘をいただきます。というわけでこの日の船上見学会は、カレーフェスティバルの会場でピラを配ることにしたのです。30 分で 160 枚ほどのピラを配り終えました。さて、その効果は…? 午後 1 時 30 分の出航時にはピラを見た方が 13 名も来て下さいました。

参加者に満足してもらえぬ企画だけでなく、どうやって参加していただくか、これからも工夫を続けていきたいと思っております。 (木塚久仁子)

情報ライブラリー更新状況

【2010・1・5 現在の登録数】

古写真 462 点 (+5)
絵葉書 369 点 (+5)

※ () 内は 2010 年 10 月 1 日時点との比較です。展示ホールの情報ライブラリーコーナーでは画像資料・歴史情報を順次追加・更新しております。1 ページでご紹介した絵葉書もご覧いただけます。

霞 (かすみ) 2010 年度 秋季展示室だより (通巻第 14 号)

編集・発行 土浦市立博物館
茨城県土浦市中央 1-15-18
TEL 029-824-2928
FAX 029-824-9423
<http://www.city.tsuchiura.lg.jp/section.php?code=43>

1~6 ページのタイトルバック (背景) は、博物館 2 階庭園展示です。

2010 年度冬季展示は、2011 年 1 月 5 日 ~3 月 13 日となります。「霞」2011 年度春季展示室だより (通巻第 15 号) は 5 月 14 日 (土) 発行予定です。次回のご来館もお待ちいたしております。